

障害をテーマに据えた作品の存在意義について

[創作タイトル]：『海の個性』

要旨

氏名：四倉 拓馬

発達障害や自閉症、アスペルガー症候群、ADHD（注意欠陥多動性障害）といった言葉はここ数年で私たちにとって随分と身近なものになった。創作において上記の障害を持った人物が登場したり、若者たちの会話においても発達障害やアスペルガー症候群といった言葉が登場するのはそれほど珍しいことではない。しかしながら、それらの障害に対する正しい理解も広まっているとは言いがたい。むしろ筆者が現代日本の状況を観察した時に、誤った思い込みや俗説が少なくないという状況が見て取れた。

そうした日本の現状に対する違和感から、私は今回研究プロジェクトに「創作」という形で参加した。今日までの発達障害、特に自閉症をテーマにした作品においては彼らの生活を主軸に据えて丹念に描写した作品が見当たらなかったため、そうした作品を作ることに一定の意義があると考えた。

副論文においては自閉症の定義を確認し、1943年に出版されたレオ・カナーの論文にまで遡って自閉症の認識の変遷をたどった。その後先行研究を分析し、英語圏に大きな議論を巻き起こしたウェイクフィールドの不正論文についても扱った。

最後に私自身の作品を学術的見地から分析した。そして副論文で分析してきた自閉症に対する現状の理解、自閉症者への背景知識の不足といった問題に対し意義のある社会派の小説を執筆することにより私の研究プロジェクトを総括とした。